

概要報告

実施期日	7月29日(火)【午前】
部会名	小学校 総則部会

テーマ 『児童の学習意欲の向上と基礎基本の定着を目指して
～「ホームワークアップ週間」と朝学習「えななみタイム」のとりくみ～』

提案概要

①学力定着に向けた家庭学習習慣確立のための「ホームワークアップ週間」のとりくみ

(ねらい) ・学校外でも学習習慣を身につける取り組みを意図的に行う。

・主体的に学習しようとする態度や計画的に物事に取り組む態度を育てる。

自ら積極的に学習に取り組もうという姿勢が弱く、家庭学習習慣も不十分なところが見られるという児童の実態から、家庭学習の習慣化を図るために、上記のねらいを掲げ「ホームワークアップ週間」を設定。毎月1週間を「ホームワークアップ週間」とし、学年数×10分を目標に家庭学習を実施。3年間の取り組みを経て、児童にも定着した。また、保護者の理解も得ることができている。課題としては、家庭学習の必要性について児童・保護者の意識をさらに高めるにはどうしたらよいか、日常的な家庭学習時間の拡充及び宿題以外の主体的な学習の充実を図るにはどうしたらよいか、引き続き検討していく必要があると考えている。

②意欲を高める朝学習「えななみタイム」のとりくみ

算数を楽しみ、教材にふれる機会を多くしていきたいと考え、毎週火・木曜日の朝10分間を活用し、パターンブロックやタングラム、ジャマイカ等の教具を利用するハンズオン・マス(体験的活動を通した算数の学習)を取り入れた学習に全校・全職員で取り組んでいる。限られた教具ではあるが、学期ごとの計画表に基づいて各担任が子どもの活動をより活性化するような手立てをとり、「全員参加型」のスタイルを定着させてきた。児童が活動を楽しみにするようになり、学習意欲の向上につながっている。また、数や図形の基本的な概念の形成や基礎的な計算力の定着化、子どもたちが多様な考え方をもちことにもつながってきている。課題としては、操作活動の内容の充実及び実践の共有化を図ることと考えている。

質疑概要

なし

研究協議概要

(協議の柱)

①家庭学習習慣確立の取組について

②学校として取り組んでいる朝学習、帯時間について

2つの柱において、1グループ約6名の8グループに分かれて協議を行った。そして、各グループにおいて話し合われたことをまとめ、発表し、共有化を図った。

(協議の柱①について)

- ・家庭学習は、漢字・計算中心の宿題。
- ・保護者向けにプリントを配布したり、懇談会で家庭学習の大切さをアピールしたりするなど、家庭の意識が向上する取組をしていくことが大切である。
- ・継続することを重視し、家庭学習習慣の確立を図った「自学ノート」に取り組ませる。
- ・自学ヒント集は、何に取り組めばいいか困っている子に対して、一つの指標になるのではないかと。
- ・長い時間と根気が要るが、家庭と学校が双方向から励ますことが重要である。
- ・ホームワークアップ大作戦の記録は、個々を追って変容を見取ることができる。
- ・1年生のときから家庭学習習慣の意識づけを保護者に呼びかけていく必要がある。
- ・子どもたち同士が競い合うのではなく、励まし合うような取組にすべきである。

(協議の柱②について)

- ・学校としての取組は、朝読書や読み聞かせ。
- ・学年やクラス単位での取組が多い。
- ・一教科に重点をおいて取り組んでいる。（例：国語→音読、群読）
- ・曜日によって内容を変えて取り組んでいる。（漢字、文章問題、視写、計算など）
- ・年度始めにテストを実施し、個々の実力を事前にチェックし、弱点強化をねらう。
- ・毎朝読書を継続している。（子どもを落ち着かせるためにも有効）
- ・朝の時間に走る。（1年生の遅刻が多い、授業で寝るなど諸課題に対する策として実施）

まとめ概要

本提案は、『基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させる』、『主体的に学習に取り組む態度を養う』、『家庭との連携を図る』という要素を満たした実践に基づいたものであった。

学力定着に向けた家庭学習習慣確立のための「ホームワークアップ週間」の取組、意欲を高める朝学習「えななみタイム」の取組、どちらにおいても学校全体で系統立て、全職員で取り組んでいることで、とても大きな成果を生み出し、また、全職員で学校全体の課題を共有することもできる。この協働体制は、何事に取り組むうえでも望ましい。

「ホームワークアップ週間」の取組においては、さらに学習習慣・生活習慣の見直しを図りながら、家庭学習の継続を促していくことが重要である。また、自主的な学習を促す環境づくりも求められる。そして、研究協議でも多く話題にあがった「学校と家庭の連携のあり方」においても、地域性や学校規模に即したものを各校で検討していくことが大切である。

「えななみタイム」の取組においては、様々な成果がみられた。まず、読み・書き・計算ではなく、パズルの要素を用い、操作活動を取り入れることで、考える楽しさを味わうとともに、物事に粘り強く取り組む姿勢や達成する喜びが育まれた。そして、友だちの考えを認め合う姿勢がみられるようになった。また、それぞれの活動ごとに活躍する児童が変わったことも児童の意欲向上につながったと考えられる。教材や教具の研究・開発においては、「大人が楽しめる」＝「子どもが楽しめる」その実感こそが、全職員の原動力となった。子どもにつけさせたい力を明確にし、教材や教具の研究にあたることが大切である。